

肥後金工⑤ 新資料紹介—^{くぎたにどうせき}釘谷洞石の作品 3 点—

八代の金工師—釘谷洞石と聴石父子の作品について、情報提供をお願いしたところ、新たに 3 点の釘谷洞石作品が見つかりました。ご協力有難うございました。

2003.12.2

新資料紹介①

^{くろふえまきぬりざやかたなごしらえ} 黒笛巻塗鞘刀拵 ^{たこずぞうがんとつば} 章魚図象嵌鐔つき

品質・形状 鞘は黒笛巻塗 縁頭・縁・鐔は赤銅地波文 目貫は赤銅地桐文でいずれも無銘

柄は白鯨革に革巻 縁頭・縁・鐔は赤銅地波文 目貫は赤銅地桐文

鐔は鉄地 木瓜形 角耳小肉 素銅据文象嵌 鉄地はややざらついた風合いで薄手章魚の足が表裏にわたって這う様は秀逸 吸盤の表現も細かく足の質感もよくでている

法 量 長さ 104.0 cm 柄長さ 24.0 cm 鐔縦 8.25 cm 横 7.6 cm

銘 文 拵袋の木札墨書「釘谷親信作/黒サヤ」「タコ」

時 代 江戸時代末期 (19 世紀)

作 者 釘谷親信 (洞石) **個人蔵**



この拵には、「親信」の作と伝えられる金具がつけられています。洞石は、「東肥親信」と銘を入れることが知られており、洞石による数少ない刀装具の作例として貴重なものです。生き生きとした章魚の表現に、洞石の技量の高さを知ることができます。



新資料紹介②

^{せんめんうちわがたふたもの} 扇面団扇形蓋物

品質・形状 鉄地 印籠蓋造 金銀布目象嵌 素銅・赤銅据文象嵌

蓋上の扇面区画には葡萄に仏手柑を表す 団扇区画には岩に波頭文 いずれも鉄地を高彫、または素銅、赤銅を据文象嵌して、上に金・銀布目象嵌を施す 側面はヘチマ文 蔓は銀布目象嵌 実は銀 花は金で文様輪郭に沿って鉄地に溝が残る

法 量 縦 8.5 cm 横 15.5 cm 高さ 3.5 cm

銘 文 底面に陰刻銘「釘谷信次」

時 代 明治時代 (19 世紀) **作 者** 釘谷信次 (洞石) **個人蔵**





扇と団扇の形をした蓋物です。底に「釘谷信次」という銘が入れています。

ブドウやヘチマなどの図柄を、高彫または素銅、赤銅の据文象嵌で表し、その上に金または銀を布目象嵌しています。やや荒削りなところがあり、まだ若い頃の作品ではないかと思われますが、洞石が金工技術を習熟していった過程を知る上でも貴重な作品といえます。

新資料紹介③

さくら こまひょうたんがたねつけ やたて
桜に駒瓢箪形根付 (矢立)

品質・形状 鉄地 桜花文は銀 葉は金色絵 馬は素銅

桜花形を蓋にして中に墨壺 口に入れ子式 (伸縮する) 筆が入る。更紗地の巾着袋が付き、青トンボ玉を緒締とする提煙草入の根付として用いていたもの。

蓋裏に金象嵌銘「松」 筆筒に陰刻銘「洞石造」

法 量 矢立長さ 7.1 cm 幅 2.9 cm 袋幅 12.3 cm 長さ 11.5 cm

時 代 明治時代 (19 世紀)

作 者 釘谷洞石 **本館蔵**

釘谷洞石 (1843～1907) は、明治 8 年 (1875) から没年まで八代で過ごした金工師です。完成度の高い精緻な作品を制作しましたが、伝存数が少なく、現在のところ館蔵の 3 点を含め、13 点しか確認されていません。そのうち、4 点が本品のような瓢箪形の矢立であり、洞石の得意とする形だったと思われます。

矢立とは、墨壺と筆を内蔵した携帯用の筆記用具で、本品は瓢箪の口内に、伸縮する筆が入り、胴についた桜花形の蓋を開けると、中に墨を湿らせた綿が入っています。細部まで丁寧なつくりで、現在は巾着袋と緒締が付属し、根付として用いられています。根付とは、腰に下げる袋などをつるした紐の先につけて、帯に挟んで落ちないようにしたもので、さまざまなデザインと材料を用いて作られており、海外でも人気が高い細工物です。

本品は、彼の代表作であり、実際の使用例がわかる上でも貴重な作品です。本品の所持者にとっては、さぞや自慢の一品だったことでしょう。

